

【卷頭言】

技術にロマンを

Seek Romanticism in Technology

取締役社長 川田忠樹
President Tadaki KAWADA



砂漠では陽が沈むと、たちまちにして夕闇が押しせまつてくる。

つい先刻まで、あんなに、憎々しいまでに赫々と輝いていた太陽が地平線におちたかと思うと、いつの間にか、すっかり夕べの闇があたりを支配して、満天の星が降るように輝きだす。

星の数ほどという言いまわしがあるが、なるほど星というのは、こんなにも多かったのかと、いまさらのように感心させられる。

考えてみれば最近日本で、星空を見上げるということは少なくなった。

あれがオリオン、ほら、あれが北斗七星だ。

と、父に手をひかれながら星座を探したこと、今では遠い昔の、懐しい想い出となり、近頃では私自身が、都会の近くで生活をしているせいか、星空を仰ぐということをとんと忘れていた。

生活に、というよりはむしろ心の裡に、それだけのゆとりを失ってしまったためかもしれないが、また一方では、私達の空に星が少なくなったせいでもあろう。

大気が汚れて、星が見え難くなり、日本の夜空はその魅力を失ってしまった。夜空の星が、私達の心を打たなくなつて久しい。

幸いなことにアラブの国に来て、私は再び夜空を取り戻すことができた。

太古から尽きることの無かった流れをたたえて、肥沃な半月地帯を潤しつづけるチグリス・ユーフラテス河のほとりで、また、かつては天然真珠と、海賊船で名をはせたアラビア湾の浜辺に佇んで、私は沈みゆく夕陽を眺め、満天を蓋いつくす星空を仰いだ。幼い頃からの、馴染みぶかい星空を追って、砂漠の中に立ちつくすこともあった………

古えの人達も、やはりこうして星を仰いだに違いない。らくだにもたれながら、オアシスの樹陰で、彼等も星空を眺め、そこに幾多の星座を見出し、そして神話を創造した。

もっとも古代の遊牧の民、隊商の群なす人々にとって、星も単なる、ロマンの中の世界だけにはとどまらなかつた。砂漠を旅する時の唯一の頼り、ただ一つの指針でもあった。

砂漠を陸の海にたとえ、らくだを、そこを旅する船にたとえた詩人がいたが、その場合、星は羅針盤である。大洋を、羅針盤なしには航海できないと同様、砂漠を旅する人々にとって、星を識らねば目的地へ向うことは出来なかつた。自分達のいま居る場所を決めることが不可能であった。

星はこのようにして、砂漠を生きる人達にとっては必要欠くべからざる、知恵となり、科学となり、技術となつた。星をロマンの世界から現実の世界に定着させることによって、アラブの人達は、科学や技術の創造者ともなつた。

アルコール、アルカリ、アルジェブラ（代数）……等々、今も冠詞の“ A1” を名残りにとどめた。アラビア語を語源とする科学用語は数多い。私達が毎日使用している 1. 2. 3. ……という算用数字も、最初はインドで発明されているとはいえ、アラブを経由して西欧社会にもたらされており、アラビア数字と呼ばれて普及をみたものである。

アラブを旅しながら、折にふれて眺めつけた夜空の星は、私にとって、まことに、幼き日々への回帰であった。

日本を離れて、久し振りに懐かしい星の世界を身近かなものとすることで、古代の人々が、そこにロマンと科学とを見出したことに思いをはせた。

当初、昭和49年に孤々の声をあげた「川田工業研究室報告」が、このたび川田建設も新たに参加して、「川田技報」として粋いを新たにすることになった。この時期に、一步の前進をみることができるということは、まことに喜こばしいかぎりといえよう。

名前は技報でも、願わくば本誌をして古えのアラブの人達のように、ロマンと科学技術の、融合の場としていただきたい。

不毛の砂漠といわれる土地にも、ロマンがあり、冒險があったことを心にとめて、技術を、無味乾燥なものに終始させてもらいたくはない。

皆さんの、技術者としてのロマンを探求するための場として、本誌を、立派なものに育てていただくことを切望してやまない。

1978年6月1日 クエートにて